
ユメルとフユキ

ムー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユメルとフユキ

【Nコード】

N0040K

【作者名】

ムー

【あらすじ】

ユメルとフユキのお話

玉瑠璃・・・人間と人魚の心が通じ合ったときに生まれる奇跡。手にしたものの願いをひとつ、かなえてくれる。

今はただ語られるだけの伝説。

だが、悲しみを超え、憎しみを超えて、互いの心が結ばれたとき
真実の思いによって、よみがえる。

「きんもちいゝ 絶好の漂流びよりだねえ」

ユメルは背伸びをして、思いつき深呼吸した。

普段、海の中で生きてきた彼女にとって、太陽の光はとても気持ちがいいものだった。

漂流日和かどうかは知らないが、確かに今日はいい天気だ。

「さて、誰か助けられないかな？いい人だといいなあ」

彼女の名はユメル。

タルにつかまって、漂流を演じていた。

天気がいいこともあり、今日はたくさんの漁師が船を出していた。
演じ始めてからすぐ、彼女は発見される。

「父さん父さん！父さんてば！」

返事が無い。フユキは海に飛び込んだ。

(・・・か、かわいい)

おいおい、そんなことを考えてる場合じゃないぞ。

(いやいやそんなことを考えてる場合じゃない)

「父さん、息してるよ！ロープ投げて！」

「う、うーん・・・」

「あ、気がついた？大丈夫、今助けるからね。」

「え？こ、こは？・・・そっか、私あれから気を失って・・・きや！？え？母さん？え？え？海？タル？え？」

「大丈夫だから、落ち着いて？ね？」

フユキは優しく笑いかけた。その顔には不思議と人を落ち着かせる力があつた。

女の子は無事、保護された。漁師の仕事は今日は休みだ。

「大丈夫か？どっか体に違和感感じるところはなとこはないか？」

「大丈夫です、ありがとうございます。」

「お前さん、どこから来た？状況、説明できるか？」

「はい・・・私、ユメルっていいいます。両親が船乗りで、漁に出ていたんです。」

私も手伝いで一緒に出たんですけど・・・魔物に襲われて・・・父は殺され、母が私だけでもと逃がしてくれたんです。きっと・・・お母さん・・・」

「そうか・・・災難、だったな」

「・・・」

「よし！うちにすめー！！」

「え？」

「父さん？」

「お前さん、どこか行くあてはあるのかい？あるならいいが、無いならうちに来るといいー！！」

男二人でむさくるしいと思ってたんだよ！漁の手伝いもできるみたいだし、ちよーどいいじゃねえかー！！」

「父さんそんないきなり」

「何でい、嫌だったのか？大体かわいそうでしかたねえじゃねえか！！困ってる奴はあ助けるのが男ってもんだ！」

熱い、熱いよ親父。素敵だ。

「ありがとうございます！！私、行くあてなんか無かったから不安で不安で・・・」

「おおおお、大丈夫だぜ、うちで暮らせばいいさ！！しっかりと働けばたらふく飯も食える！」

「よかったね、ユメル！あ、まだ言っていなかったね。僕、フユキってんだ。これからよろしく！」

「うん、ありがとうございます！こちらこそよろしくね、フユキ！」

手を握り合う二人。二人とも満面の笑みだ。

かくして、ユメルはフユキの家に居候することになった。

・・・こんなに簡単に決まるものなのか？いやはや、海の男ってのはすごい。

今日はユメルのため大事をとって帰ることに。

「ユメルはいくつなんだい？」

彼女が本当に元気っぽいので、片づけを手伝ってもらっていた。フユキと二人で網をしまう。

「私？16だよおん。ぴちぴちしてるわよお」

「あ、そうなんだ？僕と一緒にだね。てか、なんか言ってることはおばさんくさいよ？」

「あ、ちよつと失礼よそれ〜！撤回を要求する、フユキ二等兵！」

「は、失礼いたしました！前言撤回であります、隊長！」

「うむ、よろしい。」

「ぷ・・・あははは」

「あははははは」

すごいテンション・・・二人はすぐに意気投合した。ユメルは両親をなくしたとは思えないくらい、元気だった。

とても明るい子で、元気で、笑顔がかわいい子だ。しかし、フユキは何か違和感を感じる。

フユキは、いい奴だ。

父の豪快な優しさ、母の繊細な優しさ、見事に息子にミックスされていた。

母は幼い日になくしていたが、フユキの中で確実に生きている。

父のようにぐいぐい引張ることはできないが、懐の深い男だった。

（なんだろう？何か引つかかる・・・ユメル、元気なのに。笑顔が変なのかな？いやすごいかわいいんだけど、なんか、変）

フユキはその優しさゆえに、敏感でもあった。

(ふうふううまくいったあ まさかこんなうまくいくなんて・・・
あたし、役者の才能あるのかな
でも、拾ってくれたのがいい人でよかったなあ。まさか居候まで
させてくれるなんて・・・)

やっぱり、人間も人魚も関係ないよね。いい人はいい人なんだもん。

おやっさんもフユキも、すぐにいい人だってわかったし、フユキと話してるとつすぐく楽しいもん・・・私の始めての友達。

うん、これならしばらくうまくやっていけるよね。

大丈夫だよ、母さん。私、元気にやっていけそうだから。もう少し、待っててね。

(お父さんの涙、お父さんの思い、きつと届けるから。)

彼女は人魚と人間のハーフだった。

日の光が差し込む、海の中。人魚がすむ海域は世界中にあった。

人間と人魚はお互いを忌み嫌っており、人間は人魚を観賞用として狩り、人魚は人間の船をその魔力のこもった歌で沈めた。

かつて、人間と人魚は戦争状態にあった。そんな時、彼女は生まれた。

人魚のタブー。

人間との愛の間に。

父は人。人間側の將軍、項。
母は人魚。どこにでもいるただの人魚。

母は物静かで、優しく、思慮深かった。

ある時、自然災害で気を失い、人魚の姿のまま海岸に流れ着いていたのを、項が見つけた。介護し、愛し合っていたのであった。しかし、將軍の地位にいながら隠しとうすのは難しい。見つかる前に海に逃がすしかなかった。

「君のおかげで目が覚めた。親を人魚に殺されたが、憎しみあっているだけでは意味が無い。

俺は必ずこの戦争を終わらせて見せるよ。そして、戦争が終わったら、もう一度ここで……」

「項……。私待ってる。必ず……また会いましょうね。」

母は故郷へと帰っていった。お腹に子供がいると気づかずに。

母は悩んだという。産むか産まないか。この子供が生きる道は容易に想像できる。ハーフだというのは外見から容易にうかがえるものらしい。

タブーとして生まれた子供。

(……産みましょう。生を受けることがなによりの幸せ。辛くても、生きることには、無よりはるかに素晴らしいことなのだから)

そして、ユメルと名づけた。

(おい、あいつだよあいつ、例のハーフ)

(ああ、あの子なんだ、人間の血が流れてるって)

(あんなかわいい顔してわっかんねえよなあ)

(うわ、なんかくさくさね?)

(なんかあのあたりから人間の臭いがするよなあ)

(まじかんべんだよねえ)

「ねえねえお母さん、何でみんなあのおねえちゃんのお悪口言うの?」

(しっ!あの子はね、人間とのハーフなの。けんちゃんもおねえちゃんと遊んじゃだめよ)

ユメルは、本来、強く、明るく、優しく、素晴らしい女の子だ。

しかし、周りの目は冷たく、母とともに疎まれていた。

母は娘のために強くなった。周りから娘を守り、法的には守られる存在にまでした。しかし、すべてから守ることはできなかった。

娘への言葉、娘の悲しんでいる姿、自分の至らなさ……母は悲しんだ。

そんな母を見てユメルは思う。

（お母さん、ごめんね、私のせいで・・・
私、強くなるよ。どんなことでも笑っていられるように。もう泣かないよ。だから大丈夫だよ。）

感情豊かなユメルの心は少しずつ変わっていった。悲しくても涙をみせず、辛くても明るく笑う。

ユメルは心を閉ざして作り出した快活な仮面をかぶり、不幸な境遇を乗り切ろうとした。母を悲しませないようにしようとした。

ユメルは泣けない体になった。

しかし、母は倒れた。母はしゃべることができなかった。少しずつ蝕まれていく体・・・毒だった。人魚も人間も変わらない。

そして、最後の日の夜。

ユメルは泣けなかった。笑っていた。思いとは裏腹な言葉が出てしまう。

「お母さん、ユメル大丈夫だよ。強く生きるから。」

（お母さん！死んじゃ嫌だ！！ユメルを一人にしないで！！）

「だから、ごめんね、心配しないでね。」

（嫌だよ！死なないでお母さん！お母さん！！ユメル、お母さんが大好きなのに、もっともつと甘えたいのに！！）

おしゃべりだっけしたりない、一緒に料理作ったり、買い物いたり、悩み聞いてもらったり、男の子の話で盛り上がりたり・・・
ぜんぜん、ぜんぜんしたりないの・・・！だから・・・死んじゃ

やだー！！！！）

母は知っていた。ユメルが無理をしていることを。心の病にかかっていることを。

治そうと思ってもなかなか治すことができなかった。

今も娘の気持ちが伝わる。痛いほどに。

無理しなくてもいいよと伝えたい。お母さんは幸せだったと伝えたい。お母さんもあなたといたいと伝えたい。

あなたを産んでよかったと伝えたい。

しかし、言葉にすることはできなかった。娘のために、笑うしことしかできなかった。そして最後に、頂を思い、娘を抱きしめながら、息絶えるのであった。

ちょうどそのころ、戦争は終わった。

長く続いていた戦争を頂將軍が極めて短時間で双方を和解させた（それでも16年かかっているが）

人間側にも、人魚側にも戦争推進派はいる。それだけ二つの種族の

溝は深い。

これを気に少しずつ埋まっていくなのだが、母は、推進派の腹いせに毒殺されたのだった。

項は約束の場所に毎日通った。しかし、思い人に会うことはなかった。

（ごめんなさいお母さん。死んじゃう時も笑顔だなんて最悪だよ。何も伝えなかった。涙も見せれなかった。）

私のために・・・いろいろしてくれてありがとう。ごめんなさい。私が泣けないから、かわりにお父さんに泣いてもらおうね。そして、二人の玉瑠璃を持って帰ってくるから）

彼女は旅立った。

「フユキ、ユメルがそっちに行つたぜ！お前はそっちから回り込め、俺はこっちから行く。挟み撃ちだ！！」

ユメルが居候をはじめてから、数ヶ月がたっていた。

「了解だ！今日こそはギャフンと言わせてやるうぜ！！」

力強く地をかけるフユキ。今日は漁師の仕事はお休み。

友達で集まって、泥ケーをやっていた。

泥棒と警察に分かれて、鬼ごっこをする。

つかまった泥棒は警察の陣地で待機しなければならず、まだつかま

つていない泥棒は彼らを助け出すために逃げ回る。
つかまつていない泥棒にタッチすることができれば、彼らは逃げ出すことができる。全員捕まえたら警察の勝ち。
そんな遊び。

フユキはユメルを追い詰めた。ユメルは泥棒の最後の一人。最後の望みだった。

しかし足を滑らせ、フユキにいとも簡単に追いつかれてしまった。まだフユキの相棒は来ていない。

「はあはあ、やっと追い詰めたぜユメル。大人しくお縄を頂戴しやがれ。」

「・・・やっと・・・やっと二人きりになれたね」

「え？」

「家じゃ親父さんと一緒だし、遊ぶのも友達と一緒にだし、なかなか二人きりになれなかったんだから。」

「こうでもしないと、あなたと二人きりになんてなれないと思って。」

ユメルは涙目だ。ドキツとするフユキ。

・・・落ち着け、フユキ。普通に二人つきりになれてる場面なんてたくさんある。

「わたし・・・わたし、はじめて会ったときから・・・！だめ、言葉じゃこの思いは伝わらないわ・・・」

(・・・どきどき。マジか、ユメル？僕も君のことが・・・)

「・・・お願い、目を閉じて。見られてたら恥ずかしいから、ね？」

「ま、待てフユキ！！早まるな、俺が行くまで持ちこたえるんだ！
！畏なんだよ、フユーーーーーキ！！！！」

相棒は力の限り叫んだ。しかし友の耳には入らない。全力で走るが、その距離はまだだいぶあった。

(ユ、ユメル・・・)

目を閉じるフユキ。

(き、きすか?? ついにファーストキスか? ユ、ユメルとできるなんて夢のようだ。・・・夢るだけに)

フユキは気が動転していた。

(おいーおいーやばいよやばいよー。・・・ってなんか遅くね?)

チラツと目を開けると・・・ユメルは逃げていた。

「な、ユメル!？」

「そう、私の名前はユメル！！またの名を怪盗キャッツアイ！！みんなの夢を盗むんだにゃん」

手で猫耳をかたどる。極上の可愛いこぶりっこだ。

「おのれー！！ユメルー！！」

と言いつつ、フユキの顔はでれでれしていた。

(か、かわいい・・・)

・・・ダメだこいつ。

相棒からとび蹴りをくらい、キャッツアイには見事につかまえた泥棒を助け出されるのであった。

ユメルは元気にやっていた。

友達もたくさんでき、フユキともいい感じになっていた。

帰り道。

「ひでえよなあ、あんなだまし方ありかよ？」

「あーら、あんなのにだまされるなんてフユキもバカねえ。そんなんじゃない警察なんか勤まらないわよー」

「違う違う、僕はバカなんじゃなくて、純粹なんだよ」

「あはは、なにそれー」

「あはは、言ってみただけー」

「でもね・・・さっきのあれ、半分本気なんだあ」

「え？」

「何でもなあい」

「ちょ、それどういうことだよユメル！待てよー」

ユメルは走り出した。顔が赤いのを見られなくなかったから。

「またないよーだ」

ユメルは本気で楽しかった。今までこんなおしゃべりや遊びをできる相手はいなかったから。

本来の彼女は、明るく、元気。

しかし、作られた明るさが消えることは無かった。

「そうじゃねえ！！！何度言ったらわかる！？さっさと覚えないと今日の飯は抜きだぞ！！！」

親父のしごきは鬼のように厳しい。ユメルはもちろん、漁師の手伝いなどしたことはない。

仕事を叩き込まれるが、覚えるのには時間がかかる。フユキも同じ道を通ってきたが、泣きながら覚えたものだ。しかし、ユメルは泣くことは無かった。

「そうだそうだ！それでいいんだ！やればできるじゃねえか！」

覚えたときの親父の笑顔はとても気持ちのいいものだ。

フユキはそんな親父の笑顔がとても好きだった。

しかし・・・やはりユメルの笑顔には違和感を感じていた。

楽しんでいるのには間違いないが、何かが違っていた。

しばらく一緒に暮らして、その思いは確信に変わる。だが、

「私は大丈夫だよ？」

と違和感のある笑顔で微笑まれるだけだった。

(ユメル・・・いつか話してくれるのかな？)

そう思うフユキ。親父もほかの友達もそのことに気づくものはいなかった。

フユキは・・・やはりいい奴だ。

ユメルは父の情報を集めていた。

彼は英雄だった。長かった戦争を終わらせたものとして。

しかし、それは彼の理想とは程遠いものだった。お互いの間にある溝は、まだまだ深い。

民の一人一人はまだお互いを嫌いあっていた。

戦争が終わった今も、彼は机の上で戦っていた。

彼のガードはなかなか固いものであったが、ある日、彼の部屋に忍び込むチャンスがあることをユメルはつかんだ。会いに行く決意を固めるユメル。しかし、玉瑠璃の情報は得られなかった。そんなものは存在しない、伝説のしろものであることがわかった。

・・・不幸というのは続くものだ。

決行当日、今日は漁師の仕事がお休み。

また、友達で集まって遊ぶことになった。今日はかくれんぼ。

そして・・・

「ファイアフルストーム!!」

・・・人魚の姿を見られた。友達に、フユキに。

今日のかくれんぼ場所は町外れの廃屋。ユメルは反対したが、結局そこで遊ぶことに。

そして・・・案の定崩れる廃屋。逃げ遅れる友達。

魔法を使うことで助け出すことができる。ユメルは姿をさらすか迷う前に体が勝手に動いたのであった。

固まる空気。みな言葉を失った。

ユメルの下半身が陸に打ち上げられた魚のようにビチビチしていた。

・
ユメルが自分達とは違う存在なのだと強くわからせる。

(・・・フユキ・・・お願いそんな目で見ないで・・・)

フユキだけではない。そこにいるものがみな、違うものを見る目をしていた。

それは、海の中にあつたものと同じ目。

ユメルは反射的に仮面をかぶった。

「あはは、そうなの、私、実は人間と人魚のハーフなんだ。今まで黙っててごめんね。正体がばれちつまたらしかたねえ、つてやつだね

あたし、もうフユキの家にはいれないね。」

(こんな終わりいやだよ、フユキ。何で思ってる言葉が出ないの？何で泣けないの?)

ユメルは笑った。

「き、きゃあー!!」

「ば、化け物だー!!」

もしかしたら、みんななら受け入れてくれるのではないか？
フユキなら・・・

ユメルは裏切られた。

それでも、ユメルは笑う。

その場から逃げ出す友達。

フユキは言葉をはっきりすることができない。

フユキはそのような目をする気は無かった。

ただただ驚き、喉が痙攣する。口がからからだ。手足が震える。

「じゃあね、フユキ！」

(人魚でごめんね・・・フユキ)

引き止めることができなかった。ユメルは人の姿に戻り、逃げるように走っていった。

フユキは立ち尽くすことしかできなかった。

ユメルは誰もいない海に逃げ出した。

ユメルもまた、何かを考えることはできなかった。安心してしまふ。波にゆらゆら揺られる。ユメルはこれが好きだった。母の胎内にいる気分になる。

なんとなく、尾っぽを眺めている自分がいた。

(・・・そうだ、お父さんに会いにいかなきゃ。お母さんのこと伝えなきゃ。)

ユメルは放心したまま、思うのであった。

ユメルは考えることから逃げているのかもしれない。

考えると、傷ついてしまうから。自分がいなくなってしまういそいで。

その日の夜、計画通りユメルは頂のいる神殿に忍び込む。日が暮れるにつれ天候は悪化し、嵐になっていた。

ユメルの顔は笑っていたが、相変わらず目は死んでいた。

父の部屋を伺うユメル。

父は・・・女とセックスしていた。

頂は16年思い続けた。そして今でも思い続けている。母と別れてから今まで、海にかよわない日は無かった。

18というヤリタイ盛りであっても、決してほかの異性に手を出す

ことは無かった。

しかし。今日始めて違う異性と夜を共にする。

彼女は戦争中、項にふられていた。しかし、二人はお互い励ましあい、支えあってきた中であつた。

戦争が終わり、数ヶ月たった今、項にとって一夜のあやまり。自分も、相手も、傷つけると知りながら。

ユメルの心は死んだ。

ユメルの顔は笑顔で凍りつく。

警笛が鳴る。ユメルが見つかった？

いや、魔物が神殿を襲いにきた。

人間と魔物の戦いが始まる。

苦戦する人間。ユメルはなんとなく体が動いてしまつ。

(タ ス ケ ナ キ ヤ)

「ばーんすとーむ」

吹き飛ぶ魔物。助けた人間は気絶していた。

グサッ

(・・・エ?)

血が流れる。人とは違う、青い血。
背中をやりでー突き。

駆けつけた人間の増援部隊に囲まれる。

「よくもやりやがったなこの魔物め!!」

「たける!!??おのれーよくもたけるを!!!!!!」

「なに笑っていやがる糞やろーがーがあー!!」

(・・・ナニヲイツテイルノ?アア、セナカガイタイナア)

「うりゃー!!!!!!」

ズシュー!!!!!!

血が流れる。人の赤い血が。致命傷だ。

父だった。

(・・・え!?!お父さん!?!)

「こ、項將軍!?!?!」

「だ……大丈夫か? すまない、おろかな部下が……
許してくれ。人を憎まないでくれ。人と人魚は分……り合……
える……だ

……ル……リ」

父は死んだ。娘とはしらずに。

娘は……笑っていた……

「……いや……こんなの、こんなの……」

「イヤ——————!!!!!!」

ユメルは魔力を開放した。神殿ごとふきとんだ。

ユメルは立ち上がる。死ぬために。

(……私、お母さんもお父さんも殺しちゃった。私、うまれてこ
なければよかつたのに。

私……本当にマモノだったんだ。もういいよね。私はこの世に
いちゃいけない、この世で生きるのは疲れたわ)

(……海へ……フユキ……)

フキは・・・家で倒れていた。力が出ない。

ドンドンドン

「おい、フキ！！いい加減部屋から出て来い！！何があった！？
ユメルは何で帰ってこない！」

フキは考えていた。

(・・・そうか、そうだったんだ。ユメル、泣けないんだね。
笑うことしかできないんだ。辛かったんだね。)

あの時の笑顔。今までの笑顔。詳しい事情はわからなかったが、想
像することはできた。

フキは泣いた。ユメルの分まで。

(行かないや。ユメルが泣いている。)

フキは立ち上がり、歩き出す。

「やっと出てきやがった！！！！おい、フキ・・・っておい！」

フキは駆け出した。海へ。ユメルの元へ。

空は晴れていた。満月が綺麗だ。

ユメルは波に揺られていた。人魚の姿で。

血がとまることは無かった。

（・・・なんでかな、フユキのことばかり考えちゃう。嫌われちゃったのに。

ねえ、お母さん、お父さんはすごい、いい人だったよ。

お母さんのこと忘れて無かったよ。

最後にお母さんの名前、言ってた。

それからね、私もお母さんと一緒、人間の男の子が好きになったんだ。

とってもいい人。

お父さんにだっけ負けないんだから。

でもね、だましていたの。

ばれちゃったんだ。

本当のこと言えなかったの。

嫌われちゃった・・・嫌われちゃったよ。

・・・ごめんね、こんな娘で。最後なのにね。お父さん、お母さん、ごめんね。

生まれてきてごめんなさい。でも大好きだよ。（

もう長くはなかった。

「・・・メル・・・ユメルー・・・ユメルー！」

(・・・え?)

フユキは叫んだ。泣きながら。

ユメルを見つけた。

海から顔を出すユメル。お互い下半身は海の中。

「なんで・・・?」

「・・・ユメル・・・」

抱きしめた。

ユメルの体は・・・冷たかった。

ユメルの周りには彼女の血が。それはもう致命傷だということを物語る。

フユキは理解する。

「大好きだよ、ユメル」

口付けた。泣きながら。

ユメルは泣いた。

泣くことができた。

彼女の病は、治った。

彼女を幸せで満たすこと。

それが、彼女の病を治す条件。

「フユキ、私も大好きだよ」

（大好き）

ユメルは笑った。極上の笑み。

死ぬほど死ぬほど死ぬほど、かわいかった。
それは今までの笑顔とは違っていた。

そして・・・フユキの腕の中で・・・死んだ。

フユキは泣いた。抱きしめながら。

彼の涙と、彼女の涙がひとつになる。

玉瑠璃

フユキはただただ、泣いた。

満月の綺麗な夜だった。海は静かに、波打っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0040k/>

ユメルとフユキ

2010年10月16日00時29分発行